別記様式第6

# 論 文 審 査 の 要 旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

| | | | |
|---|---|---|---|
| 博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.) | 博士（　　文学　　） Ph.D. | 氏 名 (Candidate Name) | 矢ノ下　智也 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第４条第[1]・２項該当 | | |

論　文　題　目 (Title of Dissertation)
ゲルク派における業思想の研究

論文審査担当者 (The Dissertation Committee)

| | | | |
|---|---|---|---|
| 主　　査 (Name of the Committee Chair) | 教授 | 根本　裕史 | |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member) | 教授 | 杉木　恒彦 | |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member) | 准教授 | 川村　悠人 | |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member) | 准教授 | 赤井　清晃 | |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member) | 准教授 | 加納　和雄 | (駒澤大学) |

〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)

本論文は，チベット仏教ゲルク派学僧ガワンタシ（1678–1738）が著した僧院教本『縁起大論』の「行の解説」章を主たる研究対象とし，関連のインド・チベット仏教論書も併せて検討しながら，仏教業思想に内在する倫理的問題や宗教行為論の特色を明らかにするものである。

論文は，序論，第１部「本論」，第２部「付論：翻訳研究」より構成され，「本論」は全３章と結論よりなる。序論では，仏教業思想の概要を整理し，『縁起大論』の解題を与えた上で，本研究の目的と方法を提示している。次に「本論」では以下のことを論じる。

第１章では，黒白業および善・不善の概念を論じている。黒白業はヴァスバンドゥの『倶舎論』では善性（白）と悪性（黒）の両属性が交互に現れる一連の行為と定義されるのに対し，アサンガの『集論』では行為者の意思もしくは実行のいずれか一方が善性であり，他方が悪性であるような行為と定義されることを指摘した上で，他者の苦の除去を目的として実行された菩薩による悪人殺生は，意思の善性が実行の悪性を圧倒するゆえに，上記のいずれの黒白業定義にも当てはまらず白業かつ善業とみなされることを『縁起大論』の議論から示している。以上より，行為の善・不善の決定要因は「行為者の意思」にあるという考えが仏教において普遍的であることを明らかにしている。

第２章では，聖者と凡夫の業をめぐる問題を論じている。「聖者は業を形成しない」というナーガールジュナ説と「聖者も業を積む」というヴァスバンドゥ説が，輪廻への投げ入れを結果する業とそうでない業の区別により共に成り立つことを立証した後，例えば資糧道位の声聞修行者なども，解脱達成の糧となる善業を積むが，その業は輪廻への投げ入れを結果しないということを『縁起大論』の議論に基づいて示している。以上より，人は行為の放棄によってではなく，むしろ善業の実践によってこそ救われるという仏教の基本的立場を確認している。

第３章では，輪廻転生をめぐる問題を論じている。衆生一般，菩薩，声聞の種々の転生の事例の検

討により，ゲルク派における「輪廻」とは業を原因とし自身の意思によらない再生を意味することを示した後，さらにその輪廻の具体を解明するために『縁起大論』の引業・満業の議論を取り上げ，輪廻転生した衆生の個体差が『倶舎論』では加点法の原理により，『集論』では減点法の原理により説明されることを指摘している。以上より，過去に積んだ複数の業の集積によって起こる輪廻の本質と，その形成過程の詳細を明らかにしている。

結論では，インドを起源とする仏教業思想の終着点を『縁起大論』に見出し，インド仏教で主題的に論じられていなかった幾つかの倫理的問題や宗教行為論を究明する上で，同書に示される視点が有効であることを述べている。

本論文は，次の３点で高く評価できる。

１．昨今学界で議論されている菩薩の殺人行為をめぐって，チベット仏教の見地から新たな視座を提供している点。ただし，これについては先行研究の諸学説のより正確な提示が求められることも確認された。

２．仏教の宗教行為論における，「輪廻への投げ入れ」や「自立性を欠く転生」というチベット仏教概念の有効性を発見した点。ただし，これについては「輪廻」概念の細分類のさらなる検討が今後求められることも確認された。

３．『倶舎論』や『集論』などに現れる様々な業理論の和会疏通の可能性を，チベット文献から見出すことに成功している点。本論文が提示する新たな視点は，従来のアビダルマ研究や瑜伽行思想研究の見直しを迫るものである。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（文学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和６年２月８日

備考　要旨は，A4版2枚（1,500字程度）以内とする。
(Note: The summary of the Dissertation should not exceed A4 size,2pages (about 500 words).)